

暮らしナビ 暮らしスタイル

心の傷「遊び」で癒やす



東日本大震災 3年

「子ども夢ハウスおおつち」と書かれた看板がある岩手県大槌町の民家。2月中旬の午後、小学1年生の久保悠良君(7)が遊びに来た。約3キロ離れた別の学区からマイカーで惣良君を連れてきた母親は、管理人の吉山周作さん(28)に「出勤しなきゃいけない」と伝えると、急いで車に戻っていった。

公園が津波で使えなくなったり、校庭などの広場が仮設住宅や駐車場になったりして遊び場を失った子どもたちが、被災地には今も大勢いる。一方、目の前に広大な津波浸水地域が出現し、壊れたコンクリートや浄化槽がむき出しの場所でも子どもたちが鬼ごっこを始めるなど、遊びの場は危険にさらされている。

狭い仮設住宅の中で周囲に気兼ねし、我慢を強いられてきた子どもたちは、震災によるストレスを整理で



地域住民や有志が整備した「すのき公園」。夢中で遊ぶ中で子どもは成長し、心の傷を癒やす。NPO法人・日本冒険遊び場づくり協会の吉山周作さん(左)と遊具を満載して被災地を回っている「あそぼっカー」(仙台市で)

岩手・大槌 思い発散する場 住民ら手づくり

まず、心も荒れやすいとき、子どもたちが遊びを通じて、普段口にはできない思いを発散できる場を作ろう。そんな思いから昨年、夢ハウスとすのき公園は誕生した。社会福祉法人「夢のみずうみ村(本部・山口市)」が借り上げた民家を使い、4月にまずハウスが誕生。半年後、同村のメンバーや地域住民らが公園を整備した。公園の名前には「すのき」を添えてほしいとの願いが込められている。

「開設当初は大変でした。管理人の吉山さんは苦笑する。仮設住宅で我慢してきた子どもたちは、夢ハウスに来ると叫んだり駆け回ったりするのにも夢中で、片付けなど全くできない。口調が荒い女児もいた。注意してもどこ吹く風だった。

だが、夢ハウスで連日顔を合わせ、思い切り遊び、動くうちに、子どもたちは落ち着きを取り戻した。



「彼との生活は本当に幸せだった。私はいつも甘えていた。彼は幸せだったろうか?」

東日本大震災から間もなく3年。被災地の子どもをめぐる多くの課題は、全国の子どもたちを取り巻く見えにくい課題が顕在化したものとも見える。被災地の子どもたちの現状から、子どもたちの「明日を育む」ことの意味を改めて考える。

幸せだったよ

姪は若くしてリウマチを患い、心臓や肺を悪くして職場で倒れた。肺が真っ白になって10年は持たないかもしれないとも言われた。それがいい薬のおかげで元気になる、婚約者まで見つけて来た。お互い晩婚で、2人とも結婚はあきらめていたと聞いている。

女の気持ち

2014.3.4

一緒に歩く時は、いつも手をつないでいた2人。文字通り仲良く寄り添って暮らしていた。ところが2人で姪の誕生日を祝ったその日、彼はくも膜下出血で倒れ、意識が戻らぬまま帰らぬ人となってしまった。

「彼との生活は本当に幸せだった。私はいつも甘えていた。彼は幸せだったろうか?」

福岡県桂川町・自営業

西田 千草・62歳

食卓の一品

玄米と大根のきんぴら

1人前 171キロカロリー、塩分2.0g

玄米が香ばしくプチプチの食感が楽しい。

【主な材料】(2人分) 発芽玄米カップ1/4▽大根長さ5センチ▽ごま油大さじ1▽トウバンジャン小さじ1/2▽紹興酒大さじ2▽ナンプラー大さじ1

【作り方】①発芽玄米は両手で擦り合わせるようにサッと洗い、沸騰した湯で15分茹でる。

ゆで、湯を切る。②大根は厚めに皮をむき、7ミリの棒状に切る。③フライパンを中火にかけてごま油を熱し、①を加えてサッと炒め、トウバンジャンを加えてなじませる。紹興酒を加えアルコール分が飛んだら、仕上げにナンプラーを加える。

【田村佳子、写真も】